

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成20年12月号

平成二十年十二月一日発行 第十八巻第十二号 通巻第二一〇号(毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



稲妻

高橋将夫

物の影消えて色なき風となる  
宝 玉 も 化 石 も 洗 ふ 秋 の 水  
日 と 月 と 男 と 女 火 と 水 と  
木 の 実 降 り 山 の 怒 り の 静 ま り ぬ

世の中の仕組みゆるがす野分かな  
天に鳴く迦楼羅地に鳴く蚯蚓かな  
蜉蝣や回りだしたる摩尼車  
秋の声しかと即身成仏義  
でんと構へて豊年の村の長  
稲妻を見切る眼力省二の忌  
蒼天も心も澄みし若狭かな

槐十七周年全国大会二句

# 槐安集

水野恒彦

精<sup>悼</sup>靈蜻蛉の純粋な眼かな  
手足つめたく芒の海で逢へないか  
鶏頭の隣はいつもあけておく  
芒原耳あるものは耳立てて  
泛びでて刈萱いよよき色に

延広禎一

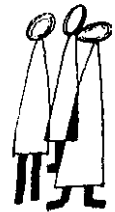
一切経蔵する山へ稲架の道  
この世とは永字八法水の秋  
涼新た腰掛茶屋に僧衣かな  
山晴や白桃の眉目菩薩なる  
人払ひせしがつまべに弾けたり

加藤みき

大芭蕉淡海の浜の実生なり  
豊年や川幅に海濁りたる  
新松子髭を剃りたる男かな  
色<sup>たが</sup>違ふ秋夕焼を畏れける  
神無月縁起絵巻のふくら顔

石脇みはる

遠景に畝傍山あり柿うるる  
白黒をつけたるのちの秋思かな  
二面石のあたりの秋のこゑ聞かむ  
邯鄲や横川めぐりてをりにける  
太つちよもやせつぽつちも月の客



中島陽華

秋思やな不二の湧水こんこんと  
円虹や寒山拾得笑ひをり  
をしの羽忘れて来たたる夜の秋  
洒落本の田舎芝居や月天心  
錦秋や綱渡りの綱張つてあり

竹内悦子

どの山もこの世の山の茂りかな  
苦瓜の赤みさしをる種であり  
頂上や色を極めて蛇莓  
貝塚に湯の神在す九月かな  
無眼耳鼻舌身意曼珠沙華

栗栖恵通子

ポツペンの底の凸凹省二の忌  
泣顔の笑ふに似たる柞かな  
長き夜の枢扉臍を疑はず  
十本の柱輪になる月夜かな  
白桔梗人形衿を重ねをり

大島翠木

裏町のさればや雨のきせる草  
秋出水泡立草の嗤ひかな  
重陽の穴ほる飯に卵割る  
我が海馬に夕ひぐらしのオノマトペ  
曼珠沙華撞木を打ちし妬心かな

雨村敏子

九月なり海の没日も白象も  
重陽の海わたりくる蘭亭序  
落蟬のこつんと静寂広ごれる  
蟬穴に入りゆくものあまたなり  
苦瓜の根にてこづつてをる玄武かな

小形さとる

幾いくたり人か入れ替はりたる月の橋  
赤鴟や出会ひがしらに泪して  
明月や魚ととのごとくに人涌きて  
花野人さつさと去いんでしまひけり  
榑山の明るき後の彼岸かな

本多俊子

夏休み縄文土器を抱けといふ  
翻ま車ん魚ぼの眼の動く晩夏かな  
溝萩や耳にあつまる星の音  
獺祭忌遠廻りして見ゆるもの  
華浄土金のくしやみをしたりけり

久津見風牛

陽のあとを月のぼりけり露の山  
顛頂より光りの波や曼珠沙華  
かなかなや墓石一つに灯が残り  
朝冷えの戸口ざわめき始めたり  
この国の浮かれてゐるやむかご飯

近藤 きくえ

袖口のいつしか湿り今朝の秋  
芒原五感すべてが風となる  
読み返す文の潤みて良夜かな  
しろがねの波自在なり望の潮  
空蒼く五体和らぐ千草かな

近藤 喜子

ばつた追ふ少年に金色の刻  
皮膚呼吸して見入りたる美術展  
一粒の粉の中なる五大かな  
秋の鮎きらめく水に抱へられ  
待宵や高々とゆく鳥の影

谷村 幸子

大掠の風に吹かれて賜高音  
川原まで月をみにゆく夕化粧  
溝蕎麦や琴坂流る水の音  
打ち揃ひ雨月の鱸膾かな  
般若寺のコスモス咲くに埋もれをり



# 槐市集

柴田靖子

この道は深き安心銀杏散る  
燃え渡りなを淋しきや曼珠沙華  
ちちろ住む闇にやすらぎ眠りけり  
振りむかずひたすら前を蟻の道  
闇のはてまでとどまらず鉦叩

庄司久美子

田の上の風に止まりし赤蜻蛉  
亜麻色の秋の蚊起こすジギスカン  
みづひきの群がる谷や歓喜天  
袋煮の揚げ広げをる木染月  
樺色の朝焼けの淵龍潜む

鈴木勢津子

論ずればみな若若し灯下親し  
手回しの充電ラジオ酔芙蓉  
一葉の紅葉す梢気高ける  
哀憐を引き寄せ近く鴉の声  
言の葉の波の表裏に秋深む

瀬川公馨

けふか明日かひたすらに夜の蟬  
道八の香炉の秋を手繰りけり  
朝明けの闇は一重か芋の露  
誰が知るや森の奥処の栗大樹  
送り火や蹲りたる餓鬼のぬし





# 槐集

## 高橋将夫選

秋霖や草に拾ひし虚具  
岡崎 松原 仲子

風美しき夜のみどりのきりぎりす  
ひぐらしの最後の声のセピア色  
砧打つ水面のひかりこなごなに  
ドビュッシーしづしづ銀河更けにけり  
月の夜の客人<sup>まらうど</sup>月をつれ来たる  
虫鳴きて夜の帳の序曲かな

安城 近藤 公子

無差別に切り倒されし鶏頭かな  
黄落にをどる音符のありにけり  
雁皮紙に筆のなめらか小鳥来る  
かりがねの列につらなるほとけたち  
花野てふ死を思はする虚空あり

東京 西村 純太

穴まどひ夢の浮橋わたりゆく  
底紅のおかれて重きデスマスク  
芦の火や亡びしものは見えざりき

地球は一つ神はいろいろ秋夕焼  
岡崎 岩月優美子

白桃の重さルノアールの女  
爽涼や天へと続く道のあり  
雁渡し解き放されし五感かな  
渾身の色と言ふべし鶏頭花  
夕光の雨の足跡秋めける

枚方 中野 京子

やはらかな灯の窓つづく無月かな  
どこかでなくここで生きます鉦叩  
曼珠沙華脈の音する水の音  
花野ゆく牛のあゆみのふたりかな  
萩こぼれ日の裏返る波間かな

京都 竹中 一花

子供らの手に猫じやらし口に歌  
大漁旗銀河の波を帰り来し  
白雲や稲刈こ糸の行き来して  
秋風の立つ日に貰ふ欠伸かな

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

砧打つ水面のひかりこなごなに  
松原 伸子

水面にきらめく光と砧の音のコラボレーションが鮮やかに表現されている。麻など植物繊維の着物は洗うとかたくなるので、木槌で打ってやわらげる。夜なべ仕事で打つのが普通だが、掲句は昼の砧。近頃は聞くこともないけれど、景は容易に心に浮かぶ。ノスタルジーを感じさせる一句。

月の夜の客人月をつれ来たる  
近藤 公子

今夜の月の美しさはまた格別のものがある。これも、久しぶりに客人と会えたからかもしれない。「今夜の月はまるで客人がつれてきてくれたようだ」といったところか。よほど大切な客人なのだろう。

かりがねの列につらなるほどけたち  
西村 純太

雁の列に仏たちが連なっているという。冬も近くなると北方から雁が列をなして渡ってくる。雁の移動に伴い、雁の守護神もまた連なってくるのであろうか。へ百代の過客しんがりに猫の子も 榎邨が思い浮かぶ。

白桃の重さルノアールの女  
岩月優美子

ルノアールには女性の絵がたくさんある。どれもふんわりとして、ふくよかな感じがする。その印象はまさに白桃といえよう。そして、掲句がユニークなのは白桃とルノアールの女を単に視覚で捉えただけでなく、重さという感覚を伴っているところに

あるといえよう。

やはらかな灯の窓つづく無月かな  
中野 京子

やわらかな窓明りが続く夜の街。月のない夜だからいつそう窓明りがやわらかに感じられるのだろう。季語の「無月」がよく効いている。無月は負のイメージが強いが、やわらかな灯火から幸せな街が想起される。

子供らの手に猫じやらし口に歌  
竹中 一花

子供たちが手に手に猫じやらしをもつて遊んでいる。口々に大声で歌ってはしゃいでいる。子供たちの無邪気な様子が手に取るように見えてくる。

ゆつたりと招く芭蕉葉省一の忌  
中田 禎子

風で芭蕉が揺れているのか、まるで芭蕉が招いているように見えるという。「ゆつたり」がいかにも芭蕉らしい。芭蕉の傍らで微笑んでいる省一先生の写真が思い出される。

全滅のクリ一匹の栗の虫  
瀬川 公馨

虫の害で栗がほぼ壊滅状態。落ちた栗から一匹の虫が這い出してきた。全ての元凶はこの虫なのだ。気の毒に、この虫、怒りの集中砲火を浴びてしまった。責任を一身に背負うはめになってしまった。

豆の木より入道雲に飛ぶジャック  
近藤 紀子

もともと天にむかって豆の木を登っていくこと自体、徒勞なのに、入道雲に飛びつこうなんて、これまた空を切る話。なんだかドンキホーテの話の思ひ出す。(以下略)